

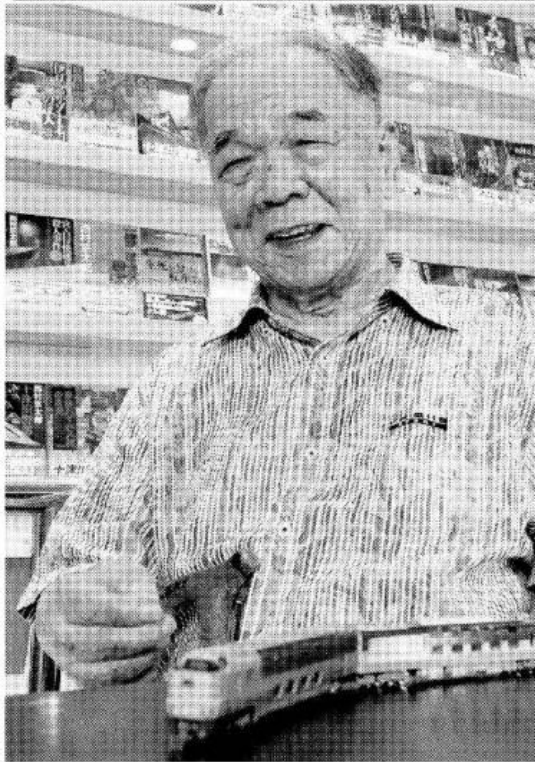


2022年で戦前と戦後が同じ長さになると、政治学者の白井聡さんが今年初めに仰っていて胸騒ぎがしました。戦争のリスクは、戦争を知っている人間がこの世にいなくなればなるほど増えていくのだな…ウクライナの、目を疑うような戦闘の映像の合間に流れたこの人の訃報に接し、唇をかみめました。

出版された著作は約700冊。戦後、最も売れた作家ともいわれる西村京太郎さんが3月3日に神奈川県湯河原町の病院で亡くなりました。享年91。死因は、肝臓がんとこの発表です。

西村さんは昨年末から体調を崩し入院をしていたとのこと。死因は肝臓がんとのことですが、いつがんが見つかり、どんな治療をされていたのかの詳細は発表されていません。がんの治療は、その進行度や

245 作家 西村京太郎



の種類のによって、推奨できる手術や抗がん剤治療を示した「標準治療」に基づいて行われることは、皆さんもご存じでしょう。標準治療とは、臨床試験を長年重ねた上で、「その治療がもたらす利益が、副作用などの不利益を上回

長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

ること」や「他の治療法より有効性が高いこと」などの科学的根拠が明らかにされた治療法のことをいいます。

しかしこの臨床試験のほとんどは、70歳代前半までの人を対象に実施したものであり、75歳を越えた高齢者には「標準治療」は確立されていないのです。

高齢になるほど、その治療の不利益が利益を上回り、QOLが下がることわかっていきます。ですから、どこまで治療を行うかは本人と医師との話し合いがより大切

になってきます。

2014年の国立がんセンターの調査によれば、90歳以上でがんが見つかった場合、切除や縮小を目指す積極的な治療は肺がんの6割、胃がんや肝臓がんでも半数では実施していないことがわかっています。近藤誠医師が長年提唱している「がん放置療法」に僕は多くの疑問もありますが、超高齢者にとっては正解であると考えます。石原慎太郎氏の訃報の際にも書きましたが、がんがあっても寿命を全うできる「天寿がん」がいくらでもあるからです。西村さんも、肝臓がんというより、天寿がんでの旅立ちかもしれません。西村さんは5年前、『十五歳の戦争 陸軍幼年学校最後の生徒』というタイトルで、「自身の経験を本にされました。『本土決戦になつたら盾となれ』と言われた15歳の少年が見た戦争の愚かしさ、無責任な国家体制…この本は西村さんの遺言です。戦後を戦前に戻してはならない。戦争を経験した先人たちの真実の言葉を、今こそ読まなければ。

根底に15歳の戦争体験